

報告

TOEIC-IP に対する教員の意識と実態 —統一試験導入から 3 年間の調査—

Steve T. Fukuda
(徳島大学全学共通教育センター)

要約:

新入生全員に統一試験の TOEIC-IP を実施し始めてから三年が経つ。初期の実施は学生自身のためではなく、全学共通教育センターが TOEIC-IP 試験の成績データで学生の英語力を把握し、授業改善に生かすことが目標であった。本センターは、今回で 3 回目ということで、共通教育の英語の授業を担当する教員向けに、TOEIC-IP 試験の成績データの活用法に関するアンケートを実施した。回収率は少なかったが、非常に興味深い結果が得られた。TOEIC-IP 試験の成績データから学生の英語力を把握することはできているが、その後の授業改善の使い方に関してはまだ分からない点が多く、これからの調査が必要であることが明らかになった。今回の結果から明らかになったのは、本センターでの TOEIC-IP 実施自体に疑問を感じる教員がいるということと、次回の実施までに授業改善につながる方策を研究してゆく必要があるということである。

(キーワード: 統一試験、意識調査、授業改善)

Survey of Teacher Attitudes towards a Unified TOEIC Test -Investigation after Three Years from the Implementation of the TOEIC-

Steve T. Fukuda
(Center for General Education, The University of Tokushima)

Abstract:

The Center for General Education has implemented the TOEIC-IP to all of its first year students for the past three years. The initial implementation was not for the students - per se, but for the Center to get an idea of the student proficiency levels and to use those results to improve classes. The Center, since the second implementation, has administered a questionnaire to the instructors of all English classes to consider how the results were used. Interestingly, many teachers have used the results to grasp the proficiency level of their students; however, few have actually used the data to improve their classes directly. This has questioned the implementation of the test based on implementation goals and has caused 'ripples' in the ocean of our center among teachers necessitating further debate on the issue before the next implementation.

(Keywords: Unified TOEIC Exam, Teachers Attitudes, Class Improvement)

1. はじめに

Test of English for International Communication for Institutional Programs (TOEIC-IP)とは国際コミュニケーション英語能力を測る試験と言われている。議論の余地はあるが、TOEIC-IP は世界中に認定され、ビジネスの場面のコミュニケーションを測るものと言われている。多くの大学で TOEIC-IP を入学試験 (185 大学) や単位認定 (230 大学) に活用している。大学にとどまらず、日本技術者教育認定機構 (JABEE) や社内昇進で活用している企業も増加している。多くの理由は団体で実施するにあたって受験料を抑えることができることである。第 1 回の実施 (1979 年) から 140 万人以上の受験者で人気のある英語力判定試験である。

TOEIC-IP の設問の多くは、会社内の英語コミュニケーションにおけるリーディングとリスニングに関して問うものである。しかし、多くの受験者は、会社内の英語そのものを身に付けたいというよりも、「国際社会での活躍」ができる能力を求めているから、英語力判定試験であるということが、人気の背景ではないだろうか。つまり、「会社英語」ではなく、「英語コミュニケーション」というキーワードに引きつけられているのではないだろうか。

2. 徳島大学における TOEIC-IP 導入の背景

徳島大学の全学共通教育センターは、平成 18 年度から大学の教育理念・目標に合わせて新しいカリキュラムを導入した。その目標・理念とは「明

日を目指す学生の多様な個性を尊重して、人間性に富む人格の形成を促す教育を行い、優れた専門能力と、自立した未来社会の諸問題に立ち向かう進取の気風を身につけた人材の育成に努める」である。そのため、カリキュラムを4科目群の編成に変え、外国語教育は「基盤形成」科目群に入れた。本センターの外国語教育の目標は、「知的技法」の修得に重点を置いた教育の実現であり、英語に関してコミュニケーション力の養成を目指すという、中期計画を掲げている。そのため学部新入生全員の統一英語能力試験を実施することになった。導入の目的として、学生の能力を客観的に把握し、その後の学習指導に活用すれば、全体的に学生の英語能力を高め、学習モチベーションも高めることができると考えている。統一試験は TOEIC-IP になっている。平成17年度10月の運営委員会で、医学部を除く全学部の積極的な賛成を得て、TOEIC-IP 導入が決定された。一方では、英語の授業を担当する教員間で多くの疑問が生じていた。議論の末、結論に至らないままの導入になってしまったという背景もある。

3. 全学共通教育センターにおける統一 TOEIC-IP 活用法の調査

本学の中期計画の「教育内容等に関する目標（「知的技法」の修得に重点）を達成するための措置」の具体的方策の一つは、「英語の学習は統一英語能力試験（TOEIC ,TOEFL など）を取り入れ、コミュニケーション力の養成を目指すことである。リーディング、ライティングなども含めた総合英語を組み合わせる」ということである。

平成19年度の「事業年度に係る業務の実績及び中期目標期間に係る業務の実績に関する報告書」に、TOEIC-IP 統一試験の今後のあり方等を明らかにするため、本センターに「英語教育の充実に関するワーキンググループ」（WG）を設置し、以下の3点を骨子としたものを報告した。

- 1) 成績を担当教員に配布し、学生の英語力に応じた授業を行うことを促進する。
- 2) TOEIC-IP 成績データの活用法を報告することにする。

- 3) 平成20年度以降も TOEIC-IP を実施することにする。

成果を出すため、本センターは、受講生の英語力に応じた授業を実施するように周知した他、授業報告書を作成・配布した。そして、平成20年度の新入生全員に再び統一試験を実施し、上述の3点に取り組んだ。その後、WG が以下3点を検討した。

- 1) TOEIC-IP 成績データの得点分布を分析した後の、英語教育への活用法
- 2) 学生個人の結果を英語の授業での成績に反映する方法
- 3) TOEIC-IP に代わる統一試験の導入開発

さらに、平成20年度年度計画の「I. 大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置」の「1. 教育に関する目標を達成するための措置」の箇所、次のように報告されている。「(1) TOEIC-IP を有効に活用するため、クラス別に成績の分布図を作成し、個人の成績と分布図を担当教員に配布することにした。資料を基に学生の英語力に応じた授業を行うよう求め、各担当教員に、TOEIC-IP の成績をどのように活用したか等に関する授業報告書を提出させた。これらについて、WG で検討する。」その後、WG は上述通りに実施している。すなわち、2度目の TOEIC-IP を平成19年度前期に実施した後、全体と学科別の結果（平均・最高点・最低点ならびに各セクションの点数等）を後期の英語授業担当者に配布し、それが学生指導に活用されたかどうかについて、後期終了時にアンケート調査を実施した。

4. TOEIC-IP 成績活用法の調査と結果

全学共通教育センターは、2回目の実施（平成19年度）と3回目の実施（平成20年度）後に、共通教育の英語授業担当教員に、TOEIC-IP 成績データを学生指導に活用したかどうかをアンケート調査で尋ねた。平成19年の TOEIC-IP 活用法のアンケート調査結果は、次のようになった。

31人に配布したところ、回収数はわずか16名

(51.6%)であった。その中、データを「よく利用した」と回答したのは、1名(6.3%)のみであった。データの利用法としては、「教科書や教材選び」や「学生のレベルチェック」が多かった。データを使わなかったという回答の理由としては「授業改善のための使い方が分からなかった」や「もらったが後期(TOEIC-IP受験は前期)で、遅すぎた。」があげられた。この結果から推測すれば、TOEIC-IP成績データは授業改善に十分に生かすことはできず、本センターのTOEIC-IP試験ワーキンググループ(WG)が提示した利用法の「学生の英語力に応じた授業を行うこと」にとどまったようだ。

平成20年度11月、7つの設問からなるアンケートを作成し、共通教育の英語担当教員に配布した。44名に配布したところ、回収数は平成19年度を下回る、わずか14名(31.82%)に過ぎなかった。設問は以下の通りである。

TOEIC-IP 成績データの使用方法に関するアンケート設問

- 1) TOEIC-IPのデータを共通教育センターから受け取りましたか。
- 2) 授業改善のためにデータを使いましたか。
- 3) 2問目で「はい」ならば、どのように活用されたか、具体的に教えて下さい。
- 4) TOEIC-IPデータは、英語授業の改善に役立つと思われますか。
- 5) 4問目での回答をいただいた理由を具体的にお答え下さい。
- 6) TOEIC-IPデータの使い方等について、お考えをお聞かせ下さい。
- 7) 統一 TOEIC-IP 試験に関するご意見をお聞かせ下さい。

1問目の「データを貰ったかどうか」という問いに、全員が「はい」(100%)と答えた。その中で、授業改善で使ったかという2問目への回答を見ると、10名(71.4%)が「いいえ」と答えている。一方で、2問目で「はい」と答えた残り4名は、以下のように TOEIC-IP 成績データを授業改善に使用したと回答した。しかし、その結果を見

ると、授業そのものというよりは学生のレベルを判断するものとして TOEIC-IP 成績を使ったように思われる。

授業改善のための TOEIC-IP 成績データの使い方

- 1) 担当学生の英語力を知る目安とする
- 2) 授業のレベル決め
- 3) リスニング強化の指導に
- 4) テキストの選択およびシラバス作りのため

設問4「TOEIC-IPデータが授業そのものに役立つのか」という問いには、8名(57.1%)が「はい」と答え、6名(42.86%)が「いいえ」と答えた。TOEIC-IPデータが役に立つ、あるいは役に立たない理由として、以下のものが挙げられた。

TOEIC-IP データが役に立つ理由

- 1) テキストの選びなおし
- 2) レベルを合わせないと効率よく授業ができない
- 3) 個人スコアのチェックをただけ。指示がなかったため授業改善に使わなかった
- 4) 学生の学力のどの部分が弱いかがわかる
- 5) 学部学科を比べるために効果的である
- 6) 受講生のレベルを把握し、授業のレベルを設定する際に非常に有効である

TOEIC-IP 成績データが役に立たない理由

- 1) もう少し様子を見て判断するべきだと思った
- 2) 多忙につき、参考にする暇なし
- 3) 授業・教材の目的は TOEIC-IP と全く関係ないので役に立たない
- 4) 授業は TOEIC-IP の準備ではないため、使う必要はない。本当に高得点をとるには、内発的なモチベーションがあれば、4週間くらいの90分セッションで簡単にとれるだろう
- 5) 使い方が分からない

「役に立った」理由についての回答も、やはり授業改善そのもののためではなく、学生のレベル把握のための使用を示唆している。「役に立たない」理由では、使い方が分からないという以外は、ほ

とんどの教員が、授業は TOEIC-IP 対策ではないため成績データが利用できない、と感じている。

本センターの英語の授業を担当している教員の意見を知るために、6 問目で TOEIC-IP 成績のデータの使い方について尋ねたところ、以下の回答が得られた。最も多かった回答は、TOEIC-IP 成績データを使って能力別クラス編成を行うべきだというものであった。一方では、TOEIC-IP 対策のような授業には違和感があるという回答もあった。

TOEIC-IP 成績データの使い方について

- 1) TOEIC-IP のセクション別の平均点が分かれば良い
- 2) 学部学科の枠を取り外し、TOEIC-IP の成績によるクラス編成をする
- 3) 共通教育センターの授業目標として使える。
例えば、基盤英語は 400 点、主題別英語は 500 点、発信型英語は 600 点
- 4) 学生の英語学習目的が TOEIC-IP のみに向けられることには非常に違和感を覚える。より個人の学習にフィードバックできるような支援システムが必要であると考え

英語の授業担当教員の率直な意見をいただくため、アンケートの 7 問目に、TOEIC-IP について自由記述欄を設けた。以下の回答から推測すると、TOEIC-IP そのものに不満を持っている教員が多い。今回のアンケート回収率の低さの理由も、このような不満ではないかと考えられる。回答者数名は、全学共通教育センターの目標である「コミュニケーション力の養成」には TOEIC-IP が相応しくないと感じている。逆に、TOEIC-IP を受けることによって学習モチベーションが下がるなど、学習時間の無駄と考えている教員もいた。一方では、TOEIC を単位の必須条件としたり、受講しない学生にペナルティーを与えたりして、外的学習モチベーションを与えたいとする教員もいた。コミュニケーション力の養成という本センターの目標に TOEIC-IP 対策の授業が相応しいかどうかという点で、多くの教員が疑問を抱いているのではないだろうか。他の英語能力判断テストの方が、

本センターに相応しいと感じるという意見もあった。

統一 TOEIC-IP 試験そのものについての自由記述の回答

- 1) 部活の練習で受験しない学生が多いので、単位の必須条件にしてはどうか。
- 2) 2 回実施し、1 回目は学生のレベルを把握するために（学生のスキルを確認した後、適当な対策を講じる）、2 回目は学生の就職に役立てる。
- 3) スコアが低い学生に、ペナルティーとして費用を負担させたり、補習的な英語の授業を受けさせたりする。この授業の最後の試験に合格できなかった学生は、卒業させない。（多くの学生は TOEIC-IP のための準備をしていないため、時間とお金の無駄である。）
- 4) TOEIC-IP を大学教育の目的にする必要はないが、勉強のためのひとつの刺激になればよい。例えば、TOEFL, TOEIC, 英検、通検、アカデミック発表等が勉強できる場で、学生や大学スタッフが参加できるプログラムを行うべき。
- 5) TOEIC のようなペーパーテストは、言語習得にオーセンティックな学習ではないため、逆効果である。私も受験し、聞いたことをすべて理解したが、満点を取ることができなかった。これは明らかにリスニング能力ではなく、暗記力のテストである。
- 6) このようなテストは日本の外国語教育の最大の問題である。一見、科学的・論理的に見えるが、テスト業者を儲けさせるだけのものである。これをするので安心してしまっていて、企業や教育機関は志願者の入学や入社の人面接をしなくてよいと考え、教育関係者は学生に質の劣った言語教育を施している。
- 7) 入試制度を変え、適切な補習コースを提供し、能力別クラスを編成し、受講者数を減らすなどのことをしないかぎり、徳島大学の英語教育に有意義な進歩は期待できない。多くの教員は現状の英語教育に満足しているか、マイナーな変更で満足しているように思える。
- 8) TOEIC-IP は、学生がコミュニケーションスキルを身に付けるには効果的ではない。近年、日

本ではコミュニケーション力を重視している。熱心に外国人とコミュニケーションを取ろうとし、会話にかなり習熟し、英語能力の今後の進歩が期待できるような学生たちもいる。しかし、コミュニケーション力を測らない TOEIC で低い点を取ると、簡単に自信を失う恐れがある。

- 9) 授業の目的をテストのための勉強にするのは、不適切である。たとえば、多くの問題は、新聞やテレビ放送の英語から出題され、コミュニケーション中心の教科書に出ていないものを取り上げている。まだそのレベルに達していない学生にとって、テストのための勉強は無意味である。まずは基本的なものをマスターした上で TOEIC レベルの英語を始めるべきであろう。
- 10) 「個人の学習にフィードバックする」ことを重視するのであれば、TOEIC は若干弱いと思われる。GTLP のフィードバックシートを先日見る機会があり、学習指針に関する非常に細かな示唆なども盛り込まれていたことから、全学的には GTLP を導入した方が望ましいのではないかと考える。

5. 今後の調査

統一試験を導入した目的は2つあった。学生の英語力の把握とそれを基に授業改善をすることである。前者の目的は確かに達成することができたと言えるだろう。しかし、後者は議論の余地があり、授業改善のための利用はほとんど見られない状態になっている。授業改善のために TOEIC-IP 成績データを使うには、何が必要なのか、どうすべきなのかということについては、議論が必要だろう。反対論の立場からみれば、表1で示しているように、学生の三年間の成績で英語力はもう既に把握しているから、これからのデータは不必要ではなかろうか。TOEIC-IP 成績データを使った本格的に英語教育の充実につながる研究と調査が必要である。たとえば、学生からの意見も聞くべきだろう。そうすれば、今回の設問7に対する意見で見られたように、トップダウンにならないことも期待できるし、学生が積極的な気持ちで受験することで、学習モチベーションや学習時間が増加する等 TOEIC-IP 導入の効果が現れてくるだろ

う。

表1. TOEIC-IP 成績の年度比較

年度	人数	平均点	リスニング	リーディング
18	1276	381.12	209.14	171.98
19	1244	396.82	227.65	169.18
20	1249	381.45	206.10	175.36

平成18年の平均点が381点（受験率95.2%）、平成19年の平均点が396点（受験率93.8%）と15点上がったが、平成20年には381点（受験率94.5%）と15点下がった

6. おわりに

要約して言えば、TOEIC-IP はビジネス・コミュニケーションにおけるリーディングとリスニングの設問で、英語力を判断する能力試験である。本学は学生のコミュニケーション力の養成を目指し、試験を導入した。学生の「能力を把握すること」と「授業改善をきっかけに英語力と学習モチベーションを上げること」を目的に考えていた。

ところが、本センターの TOEIC-IP 成績データの使い方には、多少のばらつきと多くの反対意見がある。現状のままでは、多くの教員が TOEIC-IP の成績を授業改善に使っていない。鳥飼が*大学改革の哲学 (2004 年英語教育)* で述べたように、多くの大学のように「何を目的としたどのような試験なのかについての知識も不十分のまま、ビジネス・コミュニケーション能力を測定するはずの TOEIC-IP を必修にした」ことにならないようお願いしたい。今後、本センターでは、英語の授業を担当する教員の意見を参考にし、更なる調査と研究を基に現状を改善してゆきたい。意義のある英語教育を将来の徳島大学の学生に行ってゆくためには、本学の目標に合った統一試験を実施することが望ましい。

参考文献

大石倫子・熊谷滋子. (2005). TOEICに対する静大生の意識と実態. 静岡大学教育研究, No. 1.

徳島大学全学共通教育センター. (2004). TOEIC運営委員会: 秋の調査報告書.

徳島大学全学共通教育センター. (2007). 運営委

員会の英語教育充実に関するWG資料.

鳥飼玖美子. (2004). 大学改革の哲学. 英語教育.